

「教育臨床総合研究12 2013研究」

平成24年度の基礎体験領域の取り組みについて

A Report of Approaches on the “Basic Experience Area” in 2012

山本幸市*	長澤郁夫**
Koichi YAMAMOTO	Ikuo NAGASAWA
藤田耕一***	村上幸人***
Koichi FUJITA	Yukito MURAKAMI
大谷修司***	
Shuji OHTANI	

要 旨

島根大学教育学部の教員養成カリキュラムである「1000時間体験学修」を実施してから9年が経過し、1000時間体験学修を修了した6期目の卒業生を送り出すことができた。

ここでは、平成24年度の「1000時間体験学修」における基礎体験領域の取り組みの概要、さらには基礎体験におけるアンケートから見た成果等について報告する。

〔キーワード〕 基礎体験領域、基礎体験におけるアンケート、成果と課題

I はじめに

「1000時間体験学修」は、1000時間に及ぶ体験学修を卒業要件として必修化した教育課程であり、「基礎体験」「学校教育体験」「臨床・カウンセリング体験」の3つの体験領域から構成されている。

基礎体験領域は、小・中学校等での学習支援、学童保育、地域イベント、社会教育などの教育活動や地域活動への参加を通じて、教師に必要な資質の土台となる社会性や豊かな人間性を養うものである。さらに、子ども、地域、学校と主体的に関わり、多様な体験をもとにした教育実践力を育むものである。基本的な流れは、各事業所が行う様々なプログラムの中から興味・関心のある体験活動に参加し、活動を通して自分の課題に「気づく」、その課題の解決に向けた活動の方向性を「つかむ」、活動への取り組みを「深める」という段階を経て進めていくものである。また、活動にあたっては附属教育支援センター専任教員が、事前・事中・事後指導にあたり、学生の学びがより充実したものになるように支援を行い、学生は体験で得た学びを4年間で積み上げていく。

* 島根県立青少年の家（前島根大学教育学部附属教育支援センター）
** 出雲市立佐田中学校（前島根大学教育学部附属教育支援センター）
*** 島根大学教育学部附属教育支援センター

また、活動を通して身につけさせたい資質・能力として10の力（学校理解，子ども理解，教科の基礎知識・技能，学習支援の指導技術，リーダーシップ・協力，社会参加，コミュニケーション，探求力，社会の一員としての自覚，リテラシー）を設定しており，評価の具体的観点としている。

各活動の事後指導や各基礎体験セミナーの振り返りの際には，これらの観点をもとに活動記録票の振り返りシートに自己評価をさせ，自己認識や課題意識の深化などの自己成長を促している。

II 基礎体験領域における取り組みの経緯

1000時間体験学修がスタートした平成16年度から平成24年度までの，9年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点を表1にまとめた。平成24年度の改善として実習セメスター説明会と，卒業生及び就職先への聞き取り調査の2点を挙げている。

実習セメスターでは，3年生に参加する際の心構えや得られる学び等をより理解してもらえるように，2点の変更を行った。1点目は，24年度本紀要で実習セメスターの取り組みの分析及び考察を報告しているため，その内容の一部について3年生に説明を行った。2点目は，4年生の実習セメスターの体験談発表の時間をつくり，3年生の意欲向上に繋げる取り組みとした。

25年度に10年目を迎える。このプログラムを初めて実施した学年は，5年が経過したことになる。そこで，社会に出てから，自分自身の仕事等に活かされているのか，役に立っているのか等を検証することとした。このような調査は，毎年行えるものでもないため，過去5年間の卒業生全員にアンケートを送付し，調査を行った。また，その中で，何人かの卒業生及び現在の勤務校への聞き取り調査を行った。この調査結果及び考察については，25年度に発表する予定である。

表1 9年間の基礎体験領域における取り組みの経緯と改善点
○：実施，－：未実施，△：試行，◎：改善

	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度
事業所との連絡協議会	－	－	○	◎	○	○	○	○	○
実習セメスター学外教育体験	－	－	○	○	○	○	○	◎	○
ビビットひろば	－	○	○	○	○	○	○	○	○
事前・事後指導の実施	－	－	○	○	◎	○	○	○	○
各学年の基礎セミナー実施	－	－	○	○	◎	○	○	◎	○
だんだん塾講演会 (サポート・マイスター講演会)	－	－	○	○	◎	○	◎	○	○
基礎体験活動記録票	○	○	◎	○	○	○	◎	○	○
入門期セミナーI	△	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
基礎体験合同説明会	－	－	○	○	○	○	○	○	○
実習セメスター説明会	－	－	○	○	○	○	◎	○	◎
社会教育施設との意見交換会	－	－	－	－	○	－	－	－	－
学内資格認定（3資格）	－	－	－	－	○	○	○	○	○
卒業生及び就職先への聞き取り調査	－	－	－	－	△	－	－	－	◎
専任教員数	2名	4名※1	4名	4名	5名※2	4名	4名	5名	4名

(注) ※1 H17以降1名は鳥取県から，※2 H20のみ1名は特任教員

Ⅲ 平成24年度の取り組み

《末尾に資料として「平成24年度基礎体験領域における年間活動実施一覧表」を掲載》

1. 基礎体験活動

(1) 基礎体験活動への参加実績

今年度は、表2のように、延べ2300名近くの学生が、島根県・鳥取県内で体験活動を行った。受入団体の年間活動募集総数も508件であり、幅広い分野から多様な体験活動が募集され、募集数も年々増加傾向にある。学生は自己基準をもとにこれらの活動を選択し参加している。

また、卒業要件とされる基礎体験400時間に対し、今年度卒業生の平均体験時間は637時間であり、平均237時間も多く基礎体験に取り組んでいる。このことから学生自身が体験学修の有意義感を理解し、積極的に体験を積み重ねている学生が多いことがわかる。

表2 基礎体験活動への参加実績

	H19実績	H20実績	H21実績	H22実績	H23実績	H24実績
受入れ団体数	225	226	266	295	277	264
募集活動数	369	451	475	504	511	508
学生参加活動数	341	338	340	375	400	348
参加学生延べ数	2012	1898	1953	2397	2478	2285

さらに、「松江サタデースクール」や「出雲市ウイークエンドスクール」等の基礎学力向上事業での支援活動にも継続的に取り組んでいる（表3）。松江サタデースクールは、H24年度は、小学校での活動がなくなり募集も半減したため、参加も減少している。活動の中で、現場の教師や塾長との連携の下に、地域の子どもの教育実践に積極的に参加している。教員志望の学生にとっては、この活動は貴重なものであることは言うまでもなく、子どもに対する言葉かけや関わりについて体験活動を通して培い、事後指導の様子からも自己の成長が実感できているように見える。

表3 土曜日を利用した学力向上事業への参加実績

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度
出雲市ウイークエンドスクール	25	32	40	31	31	33
松江サタデースクール	95	105	88	64	65	39
合計 (人)	120	137	128	95	96	72

1・2年生が参加する基礎体験交流会で出てきた課題は、「子どもとの接し方」が多かった。具体的には、「子どもとの距離の取り方」「ほめ方や叱り方」などに不安や悩みを抱えている。その他に、障がいのある子への支援の仕方、保護者を含め大人の人とのコミュニケーションの取り方等の課題もあった。この交流会で話し合ったり、事業所の方や事後指導でセンターの専任教員に相談したりし、さらに実践することで学生は課題を解決しようと取り組んでいる。

(2) だんだん塾（事前・事中・事後指導）

基礎体験活動を行う際には、必ず30分ずつの事前・事後指導を行っている。活動が長期にわたる場合は事中指導も行う場合もある。事前指導においては、体験活動の概要を知らせるとともに、活動の参加理由を確認し、活動を通して何を学び、どんな力をつけたいかなどの目的を明確にさせている。また事後指導では、活動の振り返りを通して自分の成長や課題を確認したり、他の参加者と学びの共有化を図ったりすることにより、体験学修の有意義感を持たせるように努めている。また、学生から出された課題に対しては、専任教員がアドバイスを送り今後の活動に向けての支援を行っている。これらの指導は4名の専任教員が地域割により分担して行っている。

毎回の事前・事後指導に費やす時間は専任教員にとって多大であるが、基礎体験活動の質の向上や意欲の継続には欠かせない活動である。

(3) だんだん塾講演会

今年度は4回のだんだん塾を開催し、多数の学生が参加をした（表4）。第1回だんだん塾では1年生が多く参加し、今後基礎体験活動において自分たちで企画・運営していく上でどのようなことが大切かを2週にわたり学んだ。第2回だんだん塾では最近の学校現場において、特別支援教育へのニーズが高まっている中、特別支援教育の重要性や具体的な事例・教師としてのあり方等を学んだ。また、第3回だんだん塾では、「伝える、伝わる話し方」ということで、自分の考えや思いを相手にわかりやすく伝えるためのテクニックや心がけなどを多く学んだ。第4回だんだん塾では、退職された高等学校の校長先生の教職実践から、教師としての心構え等を学んだ。



だんだん塾講演会は、これから教員採用試験や就職活動に向かおうとする学生にとって参考になるものが多く、来年度以降も数多くの学生が参加することを期待している。

表4 だんだん塾講演会の開催実績

回数	月日	講演者	講演テーマ
第1回	7月18日(水) 25日(水)	島根大学生涯学習 教育研究センター准教授 日野伸哉先生	企画力UPセミナー ～子どもを対象にした企画・立案のポイント～
第2回	12月5日(水)	松江市発達・教育相談 支援センター指導主事 梅田英樹先生	知ること・理解しようとする事、敬意をもつこと・まねようとする事
第3回	1月30日(水)	フリーアナウンサー 河野美知先生	伝える、伝わる話し方
第4回	2月21日(木)	前島根県立松江東高等学校長 中村清志先生	がっこうのせんせい

(※講演者の役職は平成24年度のもの)

(4) 専任教員による日常相談活動

学生からの要望で、不定期ではあるが次のような日常相談活動を行った。

- 1) 基礎体験活動における個別相談
- 2) 生活面での個別相談
- 3) 教員採用試験に向けての願書添削や面接指導, 小論文指導, 実技指導

(5) 入門期セミナー I

入門期セミナー I は, 新入生を対象とした初年次教育のガイダンスであると共に 2・3 年生の学生スタッフ参画の研修として位置づけ実施している。1000時間体験学修の全体像について学ぶ研修や朝の集いを学生企画とし, セミナーの進行や新入生への指示などの運営の大部分も学生スタッフ主体とした。今年度は, 7名の総括スタッフを中心に, 37名の学生スタッフが参加し, 2月の中旬より多大な時間と労力を費やしながらセミナーの企画や準備を行い, 新入生目線に立った有意義なセミナーを実施することができた。

新入生の感想を見ると, 4年間の大学生生活の見通しが持てたと同時に, 自分もこんな先輩に早くなりたいと思った者も多くいた。学生スタッフの感想には, 自分自身の変容や成長, 仲間とのつながりを感じたなどの内容が多くあった。

学生スタッフ参画による入門期セミナー I は, 新入生にとっても 2・3年生にとっても学び多い貴重な体験の場となっており, 今後も充実した活動になることを期待している。

【実施概要】

- 1 ねらい
 - ① 教育体験活動「1000時間体験学修」の全体像を把握し, 大学生生活 4年間の教育体験活動に対する見通しをもつ。
 - ② これからの大学生生活を共にする学生同士が交流を深め, 苦楽を共に享受しようとする仲間意識を培うと共に, 島根大学教育学部生としての自覚を高める。
- 2 期 日 平成24年 4月14日 (土)～4月15日 (日)
- 3 会 場 島根県立青少年の家「サン・レイク」
【出雲市小境町1991-2 TEL(0853) 69-1316】
- 4 参加者 島根大学教育学部 1年生176名, 学生スタッフ37名, 教職員 9名, 合計222名
- 5 内 容

4月14日 (土)	8:30	9:00	10:00	10:30	12:30	13:45	14:45	15:45	17:15	19:00	20:30	22:30	
	集合・受付	移動(バス)	身辺整理	開講式 オリエンテーション	研修 1	昼食・休憩	研修 2	研修 3	休憩	研修 4	休憩・夕食	研修 5	入浴・休憩
4月15日 (日)	7:10	7:20	7:45	9:00	12:00	13:30	14:50	15:15	16:00				
	起床・清掃	朝の集い	身辺整理・点検	朝食・準備	研修 6	昼食・休憩	研修 7	閉講式	移動(バス)	解散			

(6) 島大ビビットひろば

島大ビビットひろばとは、松江市内の小学生の土曜日の居場所づくりのために活動を提供する目的で、教育支援センター主催で開催してきた基礎体験の事業である。今年で9年目を迎え650人もの児童から参加申し込みがあり(表5)、23年度に比較して1.5倍の申し込みとなった。学生たちは、子ども達の興味関心のある活動を企画したことが参加者増につながったと分析する。子どもたちが満足する活動になるように毎週のように話し合いを行い、事前準備等をしっかり行い実践をした。本番での新たな課題も発生し、それを次の課題として生かす姿が多く見られた。



このような活動は学生自身の企画力、指導力、コミュニケーション力の育成にもつながり、回を重ねるごとに活動への自信が見られるようになった。

また、各専攻からも学生への専攻別体験として児童向けの講座を毎回開催してもらい、専攻での学びを生かした活動を提供してもらっている。

表5 ビビットひろばの開催実績

前 期	実施日時・参加者数・実施講座名
第1回	平成24年6月30日(土) 9:30~12:00 申込み者 166名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ・技術】
第2回	平成24年7月21日(土) 9:30~12:00 申込み者 228名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ・家政】
後 期	実施日時・参加者数・実施講座名
第1回	平成24年11月10日(土) 9:30~12:00 申込み者 127名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ・家政】
第2回	平成24年12月15日(土) 9:30~12:00 申込み者 129名 開催講座【教育支援センター・英語・健康スポーツ・環境寺子屋】
出張 ビビット	平成24年10月21日(土) 9:30~16:00 島根県立青少年の家のサン・レイクフェスティバルに出展

2. 各事業所との連携

基礎体験活動を推進していく上で、年間500件を超える多数の活動を提供して下さる事業所との連携を密にしていくことは、体験の量的充実だけではなく質の向上においても大切である。今年度も、基礎体験合同説明会を1回と、基礎体験活動連絡会議を2回実施し、基礎体験活動の趣旨や期待する学び、募集手続き等についての共通理解を行った。また、意見交換を通して学生によりよい基礎体験活動の学びの場や環境を作るとともに、受け入れ事業所にとっても大学と連携することによるメリットのある活動のあり方や、学生募集の方法について話し合った。

(1) 第1回 基礎体験合同説明会及び第1回基礎体験活動連絡会議
 <<平成24年4月18日(水)>>

合同説明会 (14:30～15:30)	場 所：第2体育館 参加者：1年生176名、事業所27団体
連絡協議会 (15:45～17:00)	場 所：大学会館2階第3・4集会室 参加者：事業所53名 支援センター6名

新入生は、入門期セミナーⅠを終え基礎体験活動への意欲が高まり、そのセミナーの翌週に基礎体験合同説明会を実施した。今年度も多くの受け入れ事業所が参加してくださり、今年度予定されている活動内容等について、1時間のポスターセッション方式で説明していただいた。学生たちも各ブースをまわり、実際に体験をさせていただいたり、活動内容の話の聞いたりして、今後どのような基礎体験活動に取り組んでいこうか真剣なまなざしであった。



また、第1回基礎体験活動連絡会議では、1000時間体験学修のねらいである、豊かな人間性と実践的な指導力育成に向けての取り組み方針や、基礎体験活動の流れ、事務手続き、緊急時の連絡方法等について説明し、学生にとって有意義な体験活動にするために双方の共通理解を図った。

(2) 第2回基礎体験活動連絡会議
 <<平成25年2月19日(火)>>

連絡協議会 (14:30～16:30)	場 所：模擬授業演習室他 参加者：事業所37名、支援センター5名
------------------------	-------------------------------------



第2回基礎体験活動連絡会議では、今年度の活動報告と学生の取り組み状況についての説明を行った。また、23年度に引き続き4年生が「4年間での基礎体験活動から学んだこと」について意見発表をし、参加していただいた事業所の方にも聞いていただいた。

その後のグループ別協議会は、主催団体別に学校関係、行政・社会教育施設、各種団体等の3グループに分けて実施した。各事業所からは、学生は意欲的に取り組んでいると評価していただいた。

また、学生の効果的な活用や学生の確保など、今後の取り組みに対する提案も多く出され、受け入れ先事業所同士の情報交換も図られた。

3. 実習セメスター

実習セメスターとは、3年生後期の教育実習（実習Ⅳ・Ⅴ）期間の9月から12月に実施している学外での学校教育体験活動であり、今年度で7年目を迎えた。教育実習での附属学校園での学びと、実習セメスターでの公立の幼小中高校での体験を互いに往還させながら、学校現場での学習支援の実践的な力を学生に身につけることを目的としている。

6月下旬に実習セメスター説明会を開催し、実習セメスターの趣旨や目的などについて説明した。また、受け入れ先の学校の先生に来ていただき、今の学校現場の様子や今までの実習セメスターに参加した過去の学生の話をしていただいた。さらに、4年生に昨年度の体験の様子や得た学びについて発表を行った。（右写真）



昨年に引き続き、延べ200名弱の学生が実習セメスターに参加をしたが、学校現場の先生方から学習支援の在り方や園児・児童・生徒とのかかわり方など幅広くご指導いただき、学生自身にとっても大きな学びになったようである。また、学生の中には実習セメスター期間終了後も学習支援を継続している学生も少なくなく、目的意識をしっかりと持ち意欲的に取り組んでいた。

さらに昨年度に引き続き、母校での体験という形で実習セメスターに参加した学生がいた。今年度は、19の学校園に延べ22名の学生が参加した。学校現場の中では、本学部1000時間体験学修についてご存じではない学校も多く、今回実習セメスターという形で学生が行くことによって、少しでも本学部の基礎体験活動の取り組みを知っていただくよい機会になった。

4. 学内資格認定制度

教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は延べ14名であった。内訳は表6の通りである。

資格認定者は、基礎体験セミナーにおいて自己の体験活動で得た学びを伝えたり、様々な悩みを抱えている学生に対してアドバイスをしたりするなど支援を行ってきた。下級生にとって先輩たちの生の声は説得力があり、自分自身の数年後の姿と重ね合わせながら熱心に

表6 学内資格認定者数

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	5名	2年生1名 3年生2名 4年生2名
学校教育サポーター	7名	3年生2名 4年生5名
コミュニティサービス・サポーター	2名	3年生1名 4年生1名

聞いていた。ただセミナーでは、有資格者だけでは支援者が足りず、「正課ピアサポートプログラム」を利用して、支援者を集めることとなった。今後は、学内資格についての認知をさらに広めていく必要を感じる。

IV 基礎体験におけるアンケートからみる成果

基礎体験における平成24年度の学生の学びはどのようなものであったか、その学修成果や取り組みの実態について、各学年のセミナーで行った学生の自己評価アンケート、ならびに受け入れ先事業所からのアンケートよりまとめた。

1. 基礎体験活動の評価について

基礎体験活動は、学部教育における教員としての学生の資質・能力の向上をめざし、地域の学校や社会教育施設との連携と協力により、学生により豊かな社会性や人間関係力を身につけさせ、教育的実践力を培うことをめざして実施しているものである。

基礎体験活動としてねらう力は、活動毎の振り返りに使用している基礎体験活動記録票や、プロフィールシートにも示されている、教師力10軸を基に作成したものである。そして、学年毎に実施している基礎体験セミナーでこの評価項目を基にして自己評価も行っている。

ここでは、1・2年生は1・2年生交流会、3年生は応用期セミナー、4年生は発展期セミナーで行った平成24年度の自己評価アンケートとともに、受け入れ先の事業所からのアンケートを基に、今年度の基礎体験の学びを振り返ってみたい。

2. 各セミナーで行った自己評価アンケート結果

基礎体験活動の自己評価項目を、プロフィールシートの教師力10軸に合わせた10項目（軸）と、その具体的目標である20項目の評価項目に設定している。

表7 基礎体験領域の自己評価項目一覧

1) 学校理解

- ①それぞれの学校や校種の特徴などを理解することができたか。
- ②教師の仕事を理解することができたか。

2) 子ども理解（学習者理解）

- ①子どもの発達段階の違いに応じたかかわり方をすることができたか。
- ②幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか。

3) 教科基礎知識・技能

- ①学習支援する教科等に関する基礎・基本的な知識や技能はあったか。

4) 学習支援の指導技術（授業実践研究）

- ①学習支援のための指導技術はあったか。

5) リーダーシップ・協力

- ①状況に応じて意見をまとめたり、リーダーシップを発揮したりすることができたか。
- ②活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか。
- ③グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか。

6) 社会参加

- ①自ら進んで地域社会とかかわりをもち、主として学外での活動に積極的に取り組めたか。

7) コミュニケーション

- ①学校や地域の方々と積極的に関わりを持つとすることができたか。
- ②場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか。
- ③実際の活動場で子どもの話を聞き、それにきちんと答えることができたか。
- ④体験受け入れ先の方と論理的にコミュニケーションをとることができたか。

8) 探求力

- ①自分の長所や短所、これから伸ばしていきたい能力、克服すべき課題をきちんと把握できたか。
- ②仲間と協力して企画を立ち上げ、実施するところまで責任を持って行うことができたか。
- ③自らの課題や友達と協同する課題などを解決することができたか。

9) 社会の一員としての自覚（教師像・倫理）

- ①社会の一員としての自覚と責任を持って行動することができたか。

10) リテラシー

- ①体験に関わる必要な情報を収集したり、体験活動に関する手続きをしたりすることができたか。
- ②参加した体験をふり返り、活動記録票をまとめたり、自己評価を整理したりできたか。

この10軸20項目の自己評価項目で、今年度の各セミナーの評価結果を表にまとめたものが、表8である。各評価項目とも、その結果を5段階評価の平均値で示している。

（表8中のⅠとⅡは、基礎体験への取り組みと有意義感の自己評価結果である）

学年名・評価の実施時期 ・調査人数		5段階自己評価の数値の平均値			
		1年生 2013年2月 175人	2年生 2013年2月 172人	3年生 2012年12月 168人	4年生 2012年9月 168人
	Ⅰ 取り組み	3.4	2.9	3.2	3.6
	Ⅱ 有意義感	4.0	3.8	4.0	4.1
1	学校理解①	3.1	3.1	3.6	3.7
2	学校理解②	3.1	3.2	3.6	3.8
3	子ども理解①	3.8	3.6	3.8	4.1
4	子ども理解②	3.4	3.4	3.4	3.6
5	教科基礎知識・技能	2.8	2.9	3.2	3.4
6	学習支援の指導技術	2.9	2.9	3.2	3.5
7	リーダーシップ①	3.4	3.5	3.5	3.7
8	リーダーシップ②	4.0	3.9	4.0	4.3
9	リーダーシップ③	4.2	4.1	4.1	4.4
10	社会参加①	3.7	3.5	3.6	4.0
11	コミュニケーション①	3.8	3.8	3.9	4.1

12	コミュニケーション②	4.3	4.2	4.2	4.6
13	コミュニケーション③	3.8	3.7	3.8	4.0
14	コミュニケーション④	3.7	3.7	3.9	4.1
15	探求力①	4.1	3.9	4.0	4.2
16	探求力②	3.4	3.1	3.4	3.5
17	探求力③	3.6	3.3	3.5	3.7
18	社会の一員としての自覚	3.9	3.9	4.0	4.2
19	リテラシー①	3.8	3.8	3.8	3.9
20	リテラシー①	4.0	3.8	3.8	4.0

さらに、1～20項目の自己評価の平均値を学年別にレーダーチャートのグラフにしたものが、図1である。

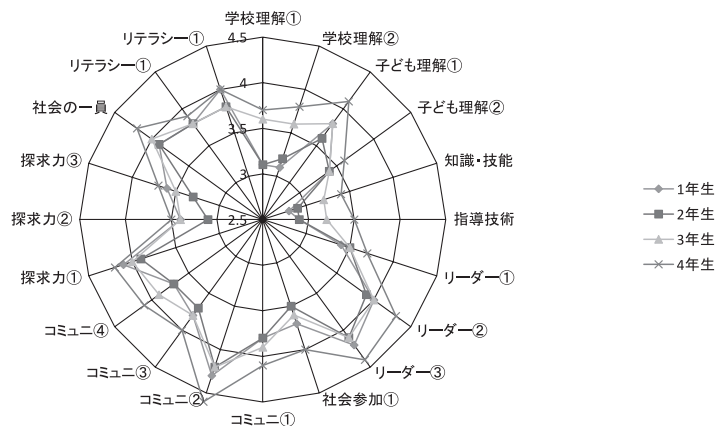


図1 基礎体験の自己評価結果グラフ

今回は同一学年の4年間の変化を示したデータではないが、図1のグラフからわかるように、学年が進むにつれて、全体的に各項目の平均値が少しずつ上がっていくのがわかる。平均値の高いものとして、4年生の平均値を見てみると4.6のコミュニケーション②（場や相手に応じた挨拶や言葉遣いなどができたか）、4.4のリーダーシップ③（グループの仲間、教員、地域の方々と協力して活動することができたか）、4.3のリーダーシップ②（活動の趣旨を理解し、組織や集団の一員として積極的に役割を担ったり、与えられた役割を果たしたりすることができたか）等があげられる。

逆に平均値の比較的低いものとしては、平均値3.4の教科の基礎知識・技能、3.5の学習支援の指導技術があげられる。これは、教科の基礎知識・技能や学習支援の指導は、教科の専門的な力量や指導経験が大きく影響するので、他の項目より自己評価が低くなったものと思われる。また、子ども理解②（幼児・児童・生徒への支援・指導・相談への対応などが適切にできたか）についても、子ども達はそれぞれ違う性格であり、個に応じた対応のむずかしさを実感した結果と言える。

また、学校理解①（教師の仕事を理解することができたか）のポイントが、2年生より3年生のほうが高いのは、3年生での教育実習や、3年後期での実習semesterでの学外学校体験を経験した影響が大きいと考えられる。

次に、表8の基礎体験活動の「取り組み」の様子と、「有意義感」の評価結果について述べる。

基礎体験学修の取り組み状況では、学年毎に2.9～3.6と平均値に違いがみられる。例年2年生は、この値が1年生の時よりも減少するが、今年度は、その幅が大きい。原因等を分析し、対応をする必要がある。5段階評価で4又は5とした学生が、1・3・4年生は50～60%、2年生も50%弱はおり全体として熱心に取り組んでいるといえる。



また、各学年の有意義感の回答結果では、3.8～4.1の結果であり、多数の学生が基礎体験活動に有意義感をもっていることがわかる。2年生の平均値は最も低い、有意義感を感じている割合は、86%と最も高い。活動を行いたいが、その時間の確保等が課題としてあげられる。

有意義感を感じる理由として整理すると次の3点があげられる。

1) 子どもとのかかわり

- ・成長する姿、発達段階を実感することができる。
- ・関わり方やコミュニケーションの取り方を実践できる。

2) 支援・指導の実際

- ・授業や学習支援の現実を把握でき、自分自身のスキルアップにつながる。
- ・日常の活動の在り方や教職等の仕事理解や体験ができる。

3) 企画・運営力の伸長

- ・企画・運営を体験することで、責任感・手順を学んだり達成感を味わえたりする。
- ・様々な人との交流、協力ができ、組織の在り方について考えることができる。

全体として、社会人としての責務や貢献による達成感を感じることができることが大きい。

逆に有意義感を感じない理由として、少数意見ではあるが、やらされている感を感じたり、教職を目指さない学生にとっては、役に立たないと感じたりしている。

3. 受け入れ先事業所のアンケート

教育支援センターでは、毎年受け入れ先事業所にアンケートを送り、基礎体験活動の学生の取り組みのようすを毎年度末に評価していただいている。その調査項目の1つである、「学生は体験活動へ積極的に取り組んでいましたか」の回答結果をグラフにしたものが図2である。

平成22年度までは「ア ほぼ全員が積極的に取り組んでいた」が60%程度であったが、平成23年度より70%を超え、さらに高評価をいただいている。積極的な取り組みであるアとイを合わせると、例年90%を超えていることから、学生が体験活動に積極的に取り組んでいる様子がわかる。

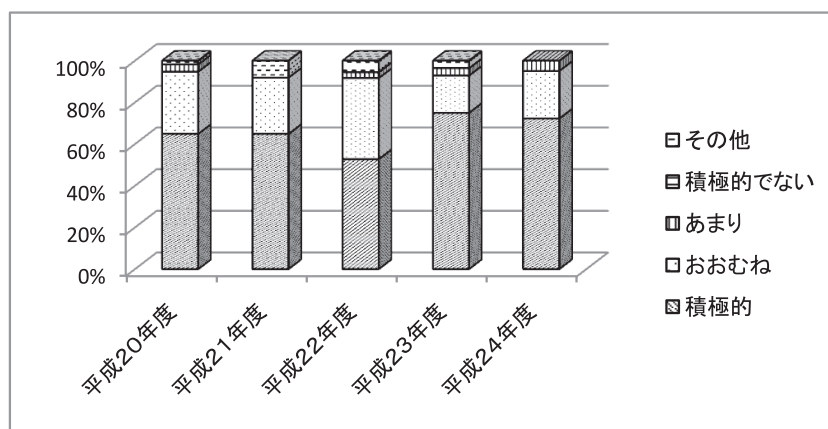


図2 受け入れ先事業所からの学生の取り組み状況のアンケート結果

次に、各事業所から送っていただいたコメントを紹介する。学生の意欲的な取り組みに対する好意的な内容が多かった。例年、学生との連絡が取れないことや、募集人数が確保できなくて困ったりしたという意見があるが、今年度は、登録しただけで不参加の学生もいるという意見もあった。

□事業所からのコメント

- 運動会においては、事前参加の学生が当日参加の学生とうまく連携を取り、チームワーク良く活動のサポートをしていた。学生の質の高さを感じる。
- 意欲が感じられ、よく頑張っていた。学生企画のクリスマス会では一人ひとりが責任をもって準備から携わり、最後までやり遂げた。
- 年間登録をしている学生にその都度、活動参加の呼びかけをするが、全く反応がない学生がいるのが残念。せめて参加できない旨の返答が欲しい。

V 成果と今後の課題

1. 1000時間体験学修の達成と改善

今年度も、卒業要件を満たす単位を取得した学生は全員が1000時間の体験学修を達成し、「1000時間体験学修認定証」を授与した。しかし、4年生前期終了時の段階で、基礎体験活動領域で400時間に達していない学生が30数名いた。その数は例年よりも多く、その後の相談や支援にかなりの時間を費やすこととなった。専攻の先生方への情報提供も定期的に行っているが、個々の学生との相談の機会をより早く持つ必要があると感じた。

4年生9月の発展期セミナーのアンケートを分析すると、基礎体験活動への有意義感を感じている学生が8割強おり、卒業後の進路決定にも6割強の学生が影響を与えたと感じている。このように、進路選択に大きな影響を与え、自分の在り方や生き方を示唆するものとなっていることが伺える。

学生は、活動を通して多くの学びや課題を得る。それがより有意義なものになるように活動を選択している。傾向として、学校での活動、企画・運営を体験できるような活動に多く登録をしている。今後もその有意義感が増加するように、受け入れ先との連携を深めながら進めていきたい。

2. 実習セメスターの改善

昨年度より母校での体験活動を取り入れ、山陰両県の協定市町以外の学校でも実施できるようにした。学生自身が、母校に連絡を取り承諾を得た後、教育支援センター専任教員から連絡をするという流れで行った。しかし、「1000時間体験学修」並びに「実習セメスター」の認知が低いため、受け入れていただいた学校への事前説明が不十分であったと感じる。来年度も、母校体験は多くなることが予想される。事前説明の流れ等を再度検証をし、受け入れ校及び学生にとってよりよい活動になるようにしていかなければならない。

昨年度の3年生対象の応用期セミナーの時に、高校での体験活動を希望するという意見が多く出た。本学部では高等学校での教育実習がないので、高校教員を志望している学生にとっては、現場を体験することができない。そこで、松江市内の私立高校を訪問し、実習セメスターの受け入れをお願いした。その結果、募集を出していただき、学生も参加をした。今後さらなる充実を図っていく必要がある。

3. これまでの活動の検証

平成25年度で、1000時間体験学修は、10周年を迎える。受け入れ先からは、高い評価を得ており、また、学生との事後指導を通して多くの学びを得ていることは、実感している。しかし、この1000時間体験学修が、実際に教育現場に出て働いている卒業生にとってどのような意味を持っているかは調査をされていない。そこで、今年度末に、過去5年間の卒業生にアンケート調査を実施し、また教職についている数人の卒業及び勤務先の管理職の先生には、聞き取り調査を行った。この結果をまとめ、これまでの検証を行い、更なる1000時間体験学修の改善を行っていくことが必要である。

(資料) 平成24年度 基礎体験領域における年間活動実施一覧表 附属教育支援センター

活動名	対象	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
基礎体験セミナー	1年	入門期 セミナーⅠ 基礎体験 合同説明会	入門期 セミナーⅡ				スタートアップ セミナー					基礎体験交流 会	
	2年						充実期 セミナー					基礎体験交流 会	
	3年									応用期 セミナー			
	4年						発展期 セミナー						
	共通	だんだん塾講演会 (サポーターマイスター講演会)		日野伸哉 先生講演							梅田英樹 先生講演	河野美知 先生講演	中村清志 先生講演
共通	だんだん塾	専任教員による学生支援活動 ①基礎体験学修の事前事後指導 ②日常的な相談活動 ③教授にむけての面接指導等											
共通	島大ビビットひろば			第1回	第2回			出張ビビット	第3回	第4回			
共通	実習セメスター			説明会		合同 事前指導							
専攻別体験学修		教育学部の名講座の専門性を生かした、講座主催による年間を通した体験プログラムの実施											
民間 協定 市町 村 港 島	NPO法人ほか民間団体	キャンプ、ジュニアリーダー養成研修、レクリエーション指導者養成、週末子ども体験事業他											
	三瓶青少年交流の家	共同調査研究事業、研修事業及び施設ボランティア											
	島根県	適応指導教室、特別支援学校学習支援、青少年教育施設での研修及び施設ボランティア 他											
	島根県松江市	サタデースクール、放課後子ども教室事業 他											
	出雲市	ウイーエントスクール、子ども科学館事業 他											
	安来市	安来子ども探検隊 島田わんぱくクラブ											
	江津市	放課後子ども教室事業、キャリア教育事業 他											
	雲南市	キャンピング											
	奥出雲町	放課後学習センター											
	飯岡町	ウオーキング大会、長期休業中学習支援											
	川本町	ウオーキング大会、長期休業中学習支援											
	美郷町	ウオーキング大会、長期休業中学習支援											
	海士町	ウオーキング大会、長期休業中学習支援											
	鳥取県米子市	科学教室、海のフェスティバル 他											
	境港市	合奏指導、スクールプロジェクト他											
	伯耆町	キャンピング、通学合宿											
	南都町												
日吉津村													
大山町													
他	島根県津和野町	子どもリーダー研修 長期休業中学習支援											